室君
檀風
照忠
三笑
舎利

十七

室君

ワキ詞 是ハ播州室乃明神ニ仕へ申神職
者なりしハ扨も天下泰平乃折
節なれハ室君達を舟にのせはや
し物をして神前にまいるハ神事
乃候ぞ此時も目出度代なれハ急
ハ神事をとりをこなハゞや

ありがたかりける　ワキ詞「御前にて遊
き室君達よ神前へ出まゐれとよ
地「長閑なる室の浦舟波も長閑
なるさいまの春来れば日もうらゝさ
ほさうらく霞も雪やおく
梅が香やく嵐山とりくまく
廣遊舞もひとへそつがひかける

此花こそはおもてかける　甲「千歳見出度
はかりしれずことぞさまれとさし
げによろづの舞をぞはじめ　上「その
舞うたふ浮世の一ぬのにぎく文字
鳥声にて風ふとよひうらのあまし女
ゞらこそまさる室きみの行舟や志
まかしあさりまするのとやらんは

それしハあゐこ乃うこちの里や我もし寺
ころて慈しさい人々あるこの海を
をるつれどやあちさおや浮舟乃さは
君も寺とさはんみちまほさりの寺
うるいんじ常ちねをねぎ給こう
人々はまこ播とど何山姫乃柳さす
らん君の山の世れとふるく日影も

みちぬ天地乃ひらきそめけりとゆろ
をさめの君てゆるおほうこや光ハ
まるし変さけてれちくよる音ゆや
ねば雨の雲の室りて花白おほぬるま
ゆきもおきの雪のみさころとも志
るやまうしのさはたちて豊年
月のつき秋も笛をさめの寺うれ

ていさや遊はん　いふかやいふか今日
出衣拍節まてそよの神楽とまう
きよきかへ　さらは神楽をまう
せうそうあり　宮とても室山
陰の神垣の　かけの宮井は有
経やうけつくまて行ますに
風おさまれはぬしきやいきやうくん

しかるに和光の利益　韋提希夫人
の姿をあらはしたちまちに玉の
うすきの羅綾の袂　風よそほ
ふ瑞雲まさに楽しみは宝の海お
まろや山はのほりて上求菩提
のことをもとめ海をくたりて
下化衆生のおことあらはすちよく

乃おハ宮ちも所の大海となり
て花やり是香らけつゝ相ゆま
また肝よめしかんろい袖とう
ゐは梅もつや他や雲乃あれも
やゆうゝ乃夢よめりてこらうよ
あうら梅のひまり

檀風

本方（ワキ）
加様ニ候者ハ佐渡嶋乃本間家人
本間乃三郎何某ニて候扨もこの
度元弘の乱ニよって公家方よりも召
人中にも壬生乃大納言資朝卿ハ
囚人と成此嶋へ流され給ひて候を
某ニ預ケられて候又昨日都より

飛脚立てず此国人をもって立帰候は
ほどに上せ候の御事にて候
同じこの中の資盛に下されまやと存
ずに泪を有　御前にて候　明日
都より飛脚立て資盛にやと参の
誅し上せとの事なるべし又明日
須乃うら野にて誅し申へし今

痛外の事まことにハづかしき番此分る
まよ付久敷国人乃ゆかりに對面ハ
禁制有へきあるまじき心得候へ
畏て候　親乃行かたを尋ゆかく
ごしら此振をするげこい　畏へ都
今熊野の末の坊よ御師の門
困楽まて宮傳みえずんば日吉よ流

是成おさなき人ハ壬生乃大納言資
朝卿乃御子息梅若子なり父資朝
卿ハ遠流乃身と成給ひ佐渡の嶋に
御座候を今一度御對面あるへき由
仰られ候間數きし下都を忍ひ出候
今日御供申佐渡乃嶋へと急き候
名残あれ都乃空ハ遠さかりゆく

古郷ハたちはなれこしの海とそなりて
末ハまたはるかなる津の舟出して
波路はるゝの振衣浦と須の雲か
てりハ沖なる里こゆるく佐渡か嶋
嶋なとまきにゆく　急候程に
佐渡乃嶋に着て候此所にて国
人をまち本間と申人の所を

薬師と申まいらせ候にてんぞ西方へは
へくづに案内申候　トモ「誰にて渡り
候ぞ　ワキ「国人奉行本間殿とはこの
ころさらに候はゞ　トモ「御身は何方の
館にて候ぞ何の御用にて候ぞ
ワキ「是は都今熊野あかつきの本覚坊より
帥の阿闍梨と申山伏にて候が是

かわらに候たゝさむらふ人ハ壬生大納
言資朝卿の御子息にて候が名をは梅若の
子と申候が父にて今一度御対面の為に
為にさねく是迄上り候ぞ然
よしを何事へ御申あはれ候へ資朝の
へ対面させられて給はり候へ　トモ「長田
家にて候がさりながら国人の御ゆるしなくての

御寄らハ候て御三の宮の事
申され候へ大ぜいれきい御方めさるべく
都より御下向あるべき仰せの旨心得候て
そこを本宮殿へ下向の折節御
行候へ心得(トモ)候へ共(トモ)にまいり
候ハ(ナヲ)何事にて(トモ)候門にて叶ひ候まじく
山門の衆徒出仕に寄宿の一人十二三

計成され候こと人々を以て仰せあはせられ候べく
都ハ今熊野参詣の本式坊主師檀の
園城寺下山伏の事にて候へバ式ハさ候て参詣人
先達其の大切の段乃御事にて候得共御
座候て受取御参上参り以て対面なされ
候ての候儀是迄ハ出て向乃よし
下されべく候御無用ニ候国人乃申

里都とハ申せども御樓衛乃由也と申
久方ぶりに見てとぞ入てくれよと存
里に御歌を詠み給ふ御披露あれ
秋の夕ぐれ國人乃ゆかしきかたの方
名叶ふまじ兜との大法なれただ杖ぞ問ひ
人乃あはれく御子のりかあまりに
いつもく山同ぞと出て波山伏り

見し來とおはする由也と申伎人
トモ 長ていづれに容儀の其房か殿
トモ 絵の面白りとて入てハ山へハ杖ろ衣
御かるのあまれく山百向かすなりよ
山痛くハほとよぞと御目ゆかあれ
由ぞ仰られなきら八妻ハとく乱
我家とてハ 都よれ容儀ハなく

にほひ候そ　「甲」いかさま是よ候
「本ヲ」是ハ行乃爲に御下向あつて候哉
「甲」いや今人のあかめ候是ハ都今熊野
椰乃木の坊よ師乃阿闍梨とや山伏
みつからが主是よ渡りて来れる人を
資郎の御子息御名をハ梅若と
申候資郎ハ流人となりて式鴻り

此方候よし國しめし居られ候ふ一度
御對面有度よし候て懇慮に御
越候よすがらく是迄御供申て
候ぬへきやに存候ふしく合せ申さ
書て給り候へ　「本ヲ」梅ハ資郎の御
子息にて渡り候か是迄すゝくれ
御出候よ哀れ無躰なる國への母

このあるじに對面いかゞ禁制なり
てはへたゞ思く近江よ向ふては
頼よ其忠資須は、下對面さゝ世中
さうすゑそうしゞ習ひそれよ而染へ
[甲]四ねよ作ださうは思ひ待よは称し
[本ヲ]つこ資須はへしし本同うしまゐつてれ
[三ヤサシ]流鳥は雲をとひ帰鳴は夜をも悲心

ぞれは鳥我よ独もしば人同よそとびく
我頼よの思よ春夜よゑあらし宮や
昼夜みとし配所乃月をみる故
人乃みとむ所あれたゞ住まつしき世
中に明暮如何我をもよむあつ世
ましきうきれ仆はさや [本ヲ同] 荒痛し
や行よやうし独言て何かよづるに

昌
とかくは同じ事にて候　本間殿と
御内の武方へ渡出し　唯今しまれ
子余の路にあつて昨日都より来
師匠は急ぎ誅しませよのはう
こそしれ頼に明日濱のかたへ野に浦
侍どもは痛はしおもひ誅しよへしはな宮
桜の用意にてまゐらせて作

唯今も独言に申しつるごとくかくてな
命諸人に面をさらしよりおきごとく
誅せられ給ひしとより梅若ひいて
候よ　又頼の年此御成日の作
都今熊野あたりの末の坊に師匠
阿闍梨とて山伏の十二三なる
おさなき人を伴ひ申されしは資朝

四乃御子息梅若子なくて出家の
人今一度は對面かなふまじくぞ候なく
御身向んそと御對面あれ　是こそ
杉もよしめ月を取あかりか
手乃沢ふに下つつく其は拙て
て男女子路栖め者なく寄て
門かたかへみなくゆくし恵てきつく

されは　何と御子はさうわぬと作
北の　申させ給ふ　梅は聊かちは
又縁よとのにくはゞやうらて追後し
ゆくて去年の都より宮ゑて来の
たる心中ゆゑに不便よりは猶よの
うしにてこそ御覧候へ　宗こそ都乃
春はゆりある　ほとよりゆくはそとみ

うすあかり　あはれく荒作へ
されハとておもひもよらず一向ニ
きらぬ者ゆへはいとゞなつかしく
翁つきやが御子息にてハあるまじ
行かれんが行きてハ落涙して御
不審なほらはば彼もの親も我にて
きやうの流人にてんつかず郭の配所は

あまりのだきされまいらせもあはくなかるゝ
ころなり不便よ思ふ者ゞ落涙仕
ては　御子息にてハ御座なく
候り中にも下の実の子にてはなくは
云ふて追返して給ふへ　心得よて
いやとて追返しよりまされかし
宮古前の客僧ハつれゆくかはて

甲 是ならば　な 仁の道にして資須にてよ
よてくへは所子息なくいたすべきやう
仕れん行なく聊なきものも
取かんそ　甲 なかは思案あるとも江
孫なくへ所子にくをしおこ人の心がく
是をもり給ふへきやあつけまし客ありつ
よ道にて資須へ所よらてやすからん

よへ仕られんは海し　な 梅の資朝へ
ときぬと思召すか　甲 尼極よ死
な 言語道断がうれ口舌下を取
あられ弓矢は憎氏乃神も照孫ねば
秘会ばよ下てならへ左ぐ資朝によ所
子息の肝心なきかへ所は聊入命あり
下の取子の外に士民集は一向よ

春日おん なよく習言れ笑止や
早河内へ出入れハこぞ梅若殿も
名付とはへまいり かりやすく
よろこびあひたまひも なさけの
まずひろぬむすびをつたきの年
神を忘し思ひよ宮ゐねよみさく
そをまへたゞ神もとむるれ散とそて

ぞろや命を失ふけんと其へハ他人
と云ながらこそ中を思ふ心あれ一世
と兼ねる此世またまふともさらく
ありけれ親子の中 ましてや是
なの世は妻のをもありそれ命ならても
なくや涙よかきくらす 涙みぞれ
親と子の仇なる闇の雲霞をたちひか

かゝる宮居あらたなりけるとき
きよみ神宮居より宮まれげう痛
ちしおらか力あらく武士のこゝろを
申濱乃うへ野に色ころの好
てぬしたる事あきれなしき命
ふりあら神ぞ守る宮居は道あ
ましハころもを紀氏乱れ梅花

父乃神宮居なとぞかり日乱髪
きこえしがさつま神ひ作あらく作こ
あれ弘よつきてゆくおほさとや
めで神社宮のうち野を遊くめる
彼ちたよみ儀ふかり中に鳴も
神ありつらくある代さや埋る寺
神頭乃宮あり色ありし興よりお

卿よき段　資朝卿の上に
あはれ世継へいかの夜太刀が抜ちら
御うけ給はり御十念をまて
めりかく　誉あるやなも[illegible]
まそはなく　いつに害傳せ洗たれ
ころものをきぬへめされ　長ては
いつに本間殿へ尸ゆき申す　何月

はらくめそ　左衛門尉あさてて
みうへたゞ誠ハ真のみぐめが彼者の
なまへまいらせまさに者のなかゐめ
願よ御四郎をのく助く給ゆ此
へうし　かれ痛敷が社らか我
おも娘はなに様見よてらへ
深く御隠しめ領ふよ給ゆ心

やよく思ひめされく梅若殿の御身
去明まて早船を拵へ都へ送り付
よく御回向候て思召されく是ハ
誠にさに候 中々なれ共矢へ猶も
御照覧あまし都へ送り付申候
まれにて候 何と有難や扨梅ハ此
世に無き身もならぬをやく頭

たうち給へと 西に向ひて手を
合せ 南無阿弥陀仏とたゝ
引唱へ給へハあへなき御頭を
前に打ち伏けり 荒悲しや
我をも御まして御入へ 言語
道断の御ありさまいかでか此世を
たちて御存生の中に御対面候はん

然とも御奉公之儀は つねに容儀
へ被成候頼朝乃御子ハ公方国人
候て御序同力勤候事まて候梅
若子乃御子ハ御違去れとも所
御舟とも付都へ送り被成へく候
夜其桑の館へ御出有之御心安く
御休之候へ 会比子家里宥被成

御日都へ御送り可被成候よし御配慮
さ候ハ孝養被成候 中にも御
心静かに御孝養之へ我等ハ私宅
罷り候へし猶々御出有之候それに
て候 致候やすて御館へしまひ可
つねに面々之同の番にいそ候
ひまり取し候とも存候ハへつ休之候へ

慕ひし伏し沈みて心閑りよかなり
ゆられきて有てかひなき佐渡へ
〽モ 是て候 〽上 いつに梅若子も下られ候し
本間殿の館にて今夜は御静に
御休み候へあすは父母を佐渡送
申べきよし申されしかば心安く思ひし
悦びく 〽ハ かやうに申べきやうもなければ

〽上 何とやらんしうて 〽ハ 本間をたのみて給
はれへ 〽上 あら習ひがたき師なる物
をとうしはありがたき間と申ば一旦因人
御前たてられ候へ御方は親の
敵は相模守高時にて誠の親は敵
なく思し召されば御より候て
自然の時節をも待給へ 〽ハ いや目は

前にて父を討れてこそ親の敵なれ
にくしとおもふてハ叶ひ候はし　牟　亡と
仁はむかしへハ去なから此鳴国う
て人を討てハ我か命を失ひ行とめ
されハ今き唯思召返し候へ　子　絶命ハ
生て父を討そてハ叶ひ申まし　牟　絶命
先しらしめ天下へハ叶ひまし

何ゆへ　子　中〻子討て候はんへ
牟　うらやましきれけなる事候にあやかれ此上
ハ討しもせぬへし去なから彼の
申にハ此者をも此ほとの番に掌
殊てそあるなんちて私宅に隠まいらせ守
もし候ふた人を殿であはりすれう
申候ひし籠もちつへき者よハ日本一の

疲ふては渕本色にて頭よ一去
刀を以梅花子遊ばされ候へば二乃刀を
洪崖僧佉る人し花の文殊者起合
ち損まるもの也ならば如何にかま
し梅花子と存ち候に候すれ
候くは△心あら所▽こなたへ渡り
色つら失心やいまだ火の消えられ

いたづら事成したる事めに候乃為ふ
夏虫の影を見て候へば火をとらんと
あら障子に飛び付きて候思へこそ
げにまへ候らば障子をほそめて
虫は随ひてにけりまた
火はすなはちと消されは燈火に歟
の命を落としてきさすすへきれば

そうに様ひよかく身ありて拔もし
佐々木甲内三郎が胸のあいだに
衆つあぐ三刀にて拵さて縁でされ
さらり無たれば追手はさらにあよ
毎よと逃つる　やはまいそくされ
うきて京をあり出たる山伏の師めたり
開梨をやしなそこつやを仕出あゐする

さゐ塩浦くへ逃るもとかけ行く
此ほど風を待けるさむ縁よ日和
一乃追手うの吹けれ程小舟ゆなきのやと
夜けれ　すや抜群よ末見てくだまる
あまに舟乃みそけれ洪舟に役船をこ
いふへしおよくあまためうみ役船
やゆうなよ　州崎乃へ此舟へ櫓杯

たて帆をかけつれ船の行ほともなし
おし出す舟は行く　陸より人々
討く波よりも追手の者にくは
ねはびらひらに乃せて給はれ　いやく
左様の船人ならハ此舟にハかなひ
ーーーーーーーーーーーーーー
いまし　よし船人名洪容信客傳
ーーーーーーーーーーーーーーーー
それハのせたれば此児独里乃きらくたく

いや見れば法師もあるなく　扨これ
舟を押てゆく　さも船よせれハ悔し
きらずれあまるぞ　行乃悔しく
有へきこそ乗せさせいそきける云ずれくハ成は
出舟れあらひ也　扨此風ハ　こゝち
乃この物　むかつて西にむかひそ志い
あら居りやきうとて扨これ舟を

押て行　志りの浪と　数まさは
志ら〳〵と　音をせす　我ハ
波間より漕出されハ追手ハ弥まちか
つきたり　乱笑ひや乗るかをハ
遠ざかり行追手ハ弥子をつく梅津
命ハ行と結へさ真言秦出し
たるかれハ此年月三熊野の権現

色多ミて運ひしがやうれ為にて
社人いそくこて三熊野を海上に勧請
申并に不動明王ねさうらハさく
あれ舟を二度祈申よせ乃きと申す
まされみく所やあくさ舟をよせ
とこてもよるハ明王ねさらくふけ
て祈るとさうすなそ　何此舟か

いのりをかけ給ふや　中くはす
山伏は物の氣かとて祈きし船祈
りされ山伏は来はなよ　いやさ船
よせんとてくやむかなれと大山の風雲
をまのきく年行の功をつむり
一千余箇日去はく身命を捨ゆや
権現よ新りかうきは我とうまれしの

あつれへき一こもうら二せんたに
くふわう七大八大金剛童子東方
抑我朝の霊神弘せをたま給ふく
て威光を非徳もまくありと
とせ名熊野の権現の擁ひて勝
まし給へる　つきやこちの風ゐあ
西吹風となれてへいかる謂給し

本宮證誠殿ハ弥陀如来の垂迹にて
西吹風とおもひ給ひて舟をとゞめ
給へと申し　梅丈西乃帆をもやごころ
吹くの分と思ひけハ　新宮薬師
如来乃浄瑠璃浄土ハ東にござれ
西くはと思ひ給へ　梅丈ひきかへ擂
観ハ波路乃末へ数向を　漕

那智千手観音ハ二十八部の
乃ちからも舟やめたまひて
我が母ハ　不動明王おさめし舟
縄をと舟ハつなぎし　万里おさまりハ
を行時の拍子挨のすゞこにに
けふまより都より帰りたまひに
有難きハ三熊野のちかひの末こ

すめらくたゝれ

照君

ワキ詞 是ハ唐土かうほの里ニ住居仕る者にて
候此相を洪可よ白桃王母と申夫婦
乃候ふ一人乃息女を持ちて名を昭君と
名付所胡国よりわれく籠き候ひあり
しかよに子細あつて胡国へつかはされ
候夫婦乃人の歎きふかく我等あまりに候ふ余

のみならす狩に立出とかくハ中々思ひの
散りぬる花の木陰に立よる事ハなきに
去れはこそ窓のうちに思ひかこつ
かゝるほとに宮に住居をなさるゝを
申しハ夫婦の若みゝ也 狐狸に聴き
御まゝむも善をなさてあらてこそ息安けれ
昭君と申すを名付つゝ容顔人に勝れ

あわれきハ帝都よりなかくなり明妃と
其名をあらはし給く天子にまみえ給ふ
されまゝ 狐狸つれゝて御まゝかも
かゝとも世の宿縁なれハ住み居る故
中にも諸人の中よりえらびしを胡国の
民よはりけれ漢宮万里の外にして
名残物の捨て乃空思ひやる方なかりけれ

シテ「はかなき信なれ官人とも揺行する道乃
慰めに絃管の数々を参らせて馬上に
琵琶をひく事も此時よりのはじめ也
蕃国にうつされし面影を今に思ひ出る
ひきし　彼昭君乃まゆずみは
緑の色に匂ひしも春やくる覧いと柳
思ひみだるゝ物さしよ風緒たえにみだるらん

あれて春陰乃塵をさへ払はしく
シテ「いたく庭をも清めんと祖父は帚をたつ
きへけり　ツレ「実や心を音乃まだ老のすゝき
もはらふれど散りしとは思へども風
むせぶ涙の袖乃玉たまさかに思ひ
をも子ゆへある利　シテ「さる君常乃賤
の男とよ人もや見るらん恥かしや　ツレ「只

山のおくまで入ぬれば うれしく志て
まだ秋なるし 袖寒しとは思へ
ども 子乃ためなれば さむからず
落葉乃つもる木陰にや あらしも塵と
ゆめらん 拾ふ物の積る木陰にや落
葉乃つもる木陰にやあらしも塵を
ありぬ霜雪 空も世中ようさびしくらく

心ならぬ塵の身も みだるゝひもあらぬ袖
乃露深き秋やはらしの風みちりく水
まへる落葉をもやどさんと 袖にやとさん
深き露の月影数くぞわたるみ惜し
清もあらそふ小篠のそよぐ風にも音も
さたまらぬ 嵐まりつゝ音志つ作
頭は体まで中と思ふは △ いふしこきと屋の

何よりもやさしき御事かな　シテ 翁も又それにて候

ワキ いや某もよりて見候はん　シテ 是へ入らせ給へ

ワキ めづらしや此柳を昭君の柳と申

候ふやらん　シテ さる謂の候

ワキ 又申し候はゞ柳の木のもとを立出

はりて清め給はんとやたるはかなく候そ

シテ 昭君胡国へうつされし時此柳をうへ置

われ胡国にて空しくならば此柳も

かれぬと申つる御詞の末やらん

此柳枯れ候　ワキ 実にあはれさもあり

柳に昭君が名を付しは胡国へうつされ

たまひし　クリシテ上 抑昭君胡国より

うゐはまつその古へを尋ぬるに天下

を治めさせ給ひし時　シテ 故れは胡国の

軍をおこして漢のみやこをかたふけし
されとも終に和睦してその時のちやうやく
御しやうくわん人を一人つかはさるへき
約束のありけれハ　かの漢王の宮女
みは三千人の寵愛の后をさしおかれ
中にもすくれし容の好色なる后の
姿を賢聖の障子に絵にかきしを

あまりに美しけれハ則これを
えらひて胡王の為につかはす天下の
運とはいひなから倫言なれハ力なく
うたの容をなけきとかなしひ
給ひける人をとかなしひ皆まむきあひを
續けつ御約束のかなしき故　されハ
きれいの姿いつれをもおなしくかはらて

柳髪風に乱るゝは。桃顔露を含んで
て柔和なつかしき姿なりしも。昭君が
そのかみは元義人のよく帝に備へ
たりしありさまも宮のめでたき故なれば
たくらけく首に画図にうつさる
面影のまさしくやうに見えしうちに
昭君は胡国へ遣さるべきと申されしを
君子に私なきとてやがて綸
言かはらずして昭君を胡国に遣はす
ぞりはける　むかし桃葉といひし人仙
女と契りし事ありしに仙女空に登
りて後。桃の花を鏡にうつし見れば即仙
女の姿見えしとあり。洪柳もさ
昭君の姿は。ゆかりを絵へ鏡にうつして

影をうつせし　ツレ　それは仙女のかたち也
げにそれと見えたるおもかげ　シテ　いやそれは
まことは鏡にうつしき人のうつるなり
ツレカル　身はもろこしとゆふしくれは　シテ　心やうの
持しまくは鏡　ツレ　舊郷を鏡にうつし
見し　シテ　ときつとふ猿のなくも
ツレ　それは昔に年を経て　シテ　花の鏡を
なき水え　散りぬる花や思ひの
いはくまは鏡のうちに姿を見るやとて
鏡に向ひて泣居たり
地　是も名胡国よりつかはれし王昭君の幽
魂なり住を父母別れを出し
此柳の本に来り泣出し　こゝ住の痛ミ
はかなき鏡に影をうつす父母の

姿はみえず花の　春の夜乃朧月夜よ
あらはれて　曇かゝるも影かすみて
おそろしや鬼ともやいはむ面影乃月の
まさしくみえしありしかたちハてまし
まことに鏡よいうつりけるに　鬼ハ胡
国乃王ひとりの大将呼韓邪單于が幽
霊なり　胡国の夷ハ人間なれども
姿ハうとましく見えけることよ
まくぐ冥途の鬼か　おそろしや呼韓
邪單于を見しとたちまち同じ昭君の父
母が對面の為にあらはれたり
されハ對面乃かいに姿をみるをはつかしや
それはるつきも猶いつに　四方の嵐乃我
姿鏡に写てみれバよ　いかなる鏡

に影をうつす舞袖に亂陳の姿も鏡に
立寄て見れば恐れたれ鏡にもまれたる鬼
や姿とうつるを髪もさかさまに生ひ上る
額に角生ひてゆびさきもまたまろ
ねや胡國の暮にもさらぬ心もきよき年に
名くもりは恐れたれ呼韓邪とも
なりしを姿も鏡にうつりて鏡に寄りてひさしく
も居ても鬼とは見えざりけり人とは見えて
なぞや鏡のうつりの姿もなかなかにうつる鏡も
今の鏡はいま面目なしとて立去れば
去る昭君のまゆずみも柳の糸のみだれと
ある呼韓邪が影もうつる鏡に恥ぢてかの
これまでよとてかたちも見えぬ鏡の日
はづかしの鏡も恥ぢて影もはづかしの鏡

三ヶ月乃影墨ぞめの衣心をてらすを
うつし鏡なるらく

三笑

上テサシ
晋乃恵遠廬山のふもとに居して三十
余年隠山を出ずして白蓮社をむすび
おなじく十八乃賢有其外数百人世乃
栄花を忘れて専ら西方を誦
じ文字を乱して此菴に遊止し

下哥
かくて流れを挑らし出に虎渓を越て

行住座臥の起き臥しに。座禅の
床となる月も。雨にうたるゝ折りかけの
同じ煙か谷の雲の。上に見ゆるや瀑布の乱
乃白妙の月ほの山の姿だにまこ
たそかれときは雲霧を心にてを
俗と袖をつらね鳥ならしこゝかしこに倦
て還る月もゆふべやすらふにも早

扱ノ通

霜降月の曙の。野山の草も
冬枯れや。ちる紅葉までもいろいろに
枯野の花ともしられぬ菊の花ばかりちりちる
この風も都の嵐ほどよそにゆゝまがふぞらく
晴
一とせの草庵に恵遠禅師のまこ
里の陶淵明陸修静是に過し年
て其時禅師は白蓮社でも

書を送り淵明を招かれは三人
かしこに拝せんと廬山乃住しき
石橋をも心安く渡る巖の腰
をとゝき瀑布をも詠め給へハ三千世界ハ
眼の前に尽きぬ一因縁ぞ心の中に清き
おもしろや恵遠禅師よりも今ハ
何事にかくらふへき　梅　廬山より猶

尋し者ハ我を傳ふあまつさへ虎渓の
空を左手に押申けれハ　梅　瀑布とも
言ひつゝ誠の名あるやとて　シテ　いやく
こゝはのあたり萬仞の深き瀑
布とこそ　日に香炉をこして紫煙
をなし　青くかれハ織りけるとかや
天台に掛けて寳天にも縫ふかたを

よそほひかへし　たゞちに人臣力の勞
裁し易からず　噴く抹精より向
ひく夏電をおこし　かくてつまつ
てひそかに春雷をなし　おもしろき響
是銀河の水かけりを　人間に降
落しく　合して　かへりく　四方
三国無双の武衛　今に拝まぬ心

陶淵明　彭澤
松菊を
菊を采

こそ愚なりけれ　かの琴詩酒の
友なりし　彭澤が詩よむしるしをいかにや
かくして　柳此閑門に彭澤は
今とゞめる宮にありて　十八公が
ごとくおもしろや　白衣の酒を愛し　松
菊を餐に　菊を東籬のもとにこつて
南山をのぞむかも　君に忠あるなかれや

そも/\陸修静ハ宋の明帝の御時に
仙乃法を学むで陸道士と申しゝ
後ハ廬山乃簡寂観に隠居して
まし/\けるが天下にも隠なき
けうとき事なれバ廬山の虎渓よ
り恵遠禅師のもとへまいり菊乃水を
露つもりて淵となるや不老不死の薬なる

いはまくも千とせをつみし菊萬代もかさぬ
さればもと盃乃曲水の夜もすがら
たゞ老を白菊の花を青に立ちよふたゝ
此酒狂乃舞をやくのまよひをつゝ
萬代せく松ハ久しき例なり
松ハ久しきあり年ぞ老たり
松も緑ハ木の根小松四季にぞ

陶りうく
虎渓を遠す
陶明

まし紫色の常盤木の松菊まで愛し
ござうては門へ出ずもなく
やと昔むしを捨てよろめきしハ陶淵明
右ようい志やく給ひて虎渓を遠去
給へハ陶明禅師よりて様色ハ禅
を給ひよそに高宗門と手をうちて笑
給ふ三笑のむかしも是よりなり

舎利

ワキ詞
是ハ出雲国美保乃関より出たる僧
我いまた都を見す候程に
思ひ立洛陽の佛閣一見と志し候
こゝろひく朝たつやまの雲ゐのはるの
きのふくれ今日古の跡乃かず〳〵重
ねて都にはやく着にけりく日を

市まうく思の間程なく都に着て候まゝ
承及たる東山泉涌寺へ参り大唐よ
り渡りましたる十六羅漢仏舎利
をも拝まはやと存候△是成寺を
泉涌寺と申にハ寺の人に尋ねく
案内をも乞はやと思ひ候いかに此ほとの人
何事を御尋候そ　是ハ遠国の田舎
よりいてたる僧にて候当寺の事承
及ひ遠国より参りて候大唐より渡りたる十
六羅漢仏舎利をも拝せ給候へ申候
安き間の事なれて参りかゝ御前に於き
申事叶ふましく候但今日吸御舎利入候
出有日にて候間一拝当番にて唯と戸
を明申候へく候鑰を持て来候

然此舎利を御坊に有こと度々二門
よみ登りて十六羅漢をも拝み奉りしに
拙し此方へ御出ありてかくさんと云
を囲さ申て此經を御おもへ遣はし
やはら傳へしまり給へし　宮やうくし
て何の都乃愚ありる今はまれにもばさる
霊験あるたよる仏舎利をおひ申事

乃貴きよし是ありし是疾之集りて羣
諸天より是なりさしぎょしも寺持奉れ
牙舎利乃御相承感得乃銘をねるや
一心頂礼萬徳圓滿釋迦如来
おもを住世のころして、まれあり
ある仏舎利を拝み奉る事乃行ふさを
げよたくそれし是深楽油をもゆらし

言乱色なく

シテ上 有りかたや仏在世の御

時ならば法の声をも耳にふれ法値遇

乃結縁に一劫もとりはつしの此身にあらし

二世安楽の心をもうけ後五の此代に

と更に猶執心の見仏乃縁なれど

うれしき時節なれ　ワキ内 仏前に観

念寂としてある時節に御法をきゝ

声をもありがたく人々も海山をへて

ワキ内 是は洛陽東山泉涌寺乃住者なれども

仏法の御拝を学して宝前に立寄

あり　ワキ よしみ謂そともその身ならば仏舎

利をも拝ませ申し為なり同じ心の拝ません

シテ上 和 嬉しくも今の人　ワキ 所もと　二人 都乃近

東山雲も時にしぐれてまた峯の嵐や

月西にかたむき寺井なる水澄てすごく
庭の松風さえわたり更ゆく鐘の声とも
心耳を澄す経殿にや峯の松
谷の水も声あるかやと法を唱るが
如し扨仏法の中に世法あり煩
悩あれば菩提あり仏あれば衆生もあり
善悪まちなり不二なるべし 然らずは

五百歳の佛法は末世の折として
西天唐土日域に時至るべしの此の
都あそこに仏法流布の志あるとて
佛骨を納め給ひし 宝目前の妙え
の数々御舎利になつかしき 然るに
仏法を助けて三如来四菩薩を昔
域に地をうかち衆生を済度給へり

常在霊山の秋の月雲がくれにし二月よ
りとて竈てきし沙羅双樹の苔の庭
のこしおきつる賜より粒や仏舎利
の御寺を在世ありきみや飛鳥の古山
をも植世乃みさかりに草木も法の色
そなへをもる日仏法をゆつりしに今うつる
さえくもる御しきの月を注もつ

あはれ昔乃松の間よりかゝやく白毫乃
秋乃月もそれもとより蒼海の波乃よるべ
ゆふま霊締の晴れ乃雲をひくまつらひ
たかりゆ鷲の山にそれもうつ人見ぬ心に
そうしゆ人まりし日あれ乃仏舎利を
絲もあれに寺て貴かなりける 平信 不思議
やかり御よ晴れるなてらら乃御墨の堂前よ

運く稲妻にあるをもいかなる事かあらん
今はた行ちとの所に地捧げ其古人之疫癘に
執ドけて之人舎利と望ありけるに没く
やお傳達にまたなどみきりし梅いきりけれ
面色かわり鬼とありて人舎利殿よりとま
こほしいりあく　賊にきりけるを入を
宝庫とありて栴檀らりといふ

かうべよさのうち雲煙をなして稲妻の
ごとく光り加藪紛出してどよみ兇疫鬼
ら後光をあきし鬼をおかれ人舎利殿よる
うきく知りくさえんきん出目ずくら
めそてき給ぶ一才人舎利をきりつらく大井を
蹴破りて虚空とふんであからとへ
うけまりすぢはきりく　捨之

ため此寺を守護しける菩薩は天とは我
ことあり家に号疾鬼といふ外道在
世尊の執心にて我此舎利をとりて
ゆく道のあとをききて舎利
おひてゆきやかますましとよ此法
舎利を深くもとめておろかならで欲界
色界無色界を化楽天他化

自在天三十三天からのぼりて帝釈
天と追ひあひそれ梵王天より出あひ
給ひてどもの下界に追下をなく
ゆるされ前後はの大地を突きて
て疾鬼が底までくぐりぬけて
まひめぐるを菩薩大いにいかりて
あらく疾鬼を大地に打ふせて首

ゆきて金札を打ちいだし出るや出弓とせめ
弓手もおくく金札を指さし悪魔を
天金札をおさめて家に入りける[illegible]
あやしき鬼神の[illegible]車の
ちはやぶる神さびて[illegible]
里て社に入給

右之本者觀世太夫織部
以章句真本今亦新令改
版者也
寛政十一己未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛